



～ 夢ひとすじに ～ 宮原中だより

自ら学び 心豊かに たくましく

平成 27 年度 第 13 号
平成 28 年 3 月 1 日 (火) 発行
さいたま市立宮原中学校
メールアドレス
miyahara-j@saitama-city.ed.jp
ホームページアドレス
<http://miyahara-j.saitama-city.ed.jp/>

「障害教師、谷口先生の教え」

校長 山 下 誠 二



平成 27 年度、締めくくりの月になりました。保護者の皆様、そして地域の皆様には、本年度も宮原中学校の教育活動にご支援、ご協力を賜りましたことに感謝申し上げます。

さて、私の中学時代の英語の先生は、谷口恭教先生です。谷口先生は 3 歳のとき小児麻痺を罹り、左手、右足が不自由でした。大学卒業後、英語教師として 43 年間勤務され、その間、英語弁論の指導に命を燃やされ高松宮杯（現在は高円宮）中学校英語弁論大会での 10 名の全国優勝者を輩出されました。とても厳しい先生でしたが、ユーモアもあり、思い出深い先生です。その先生は、2012 年 11 月 7 日にお亡くなりになりましたが、その先生のメモリアルブック「魔法の粉」にこんなことが書かれています。

誰とても、叩かれて喜ぶ人はいませんね。私もそうです。けれども、叩かれて嬉しい思いをしたことが一回だけあります。小学生の頃です。叩かれたのは 6 年生の時、担任の先生からです。原因は、友達を嘲笑したことによります。クラスの中に、弁当を食べるのが遅い子がいました。ゆっくりゆっくり食べます。なぜそんなに遅く食べるのか、見てみると歯がゆくなります。周りにいる数人がよってたかって冷やかし始めました。「はよ食べろ、はよ食べろ。」歌うような調子で机を叩いたり、踊ったりしました。そこへ担任の先生が急に入ってきて、その光景を見て烈火のごとく、怒られました。「この子を馬鹿にした者は皆廊下に出ろ。ゆっくり食べるのは本当はいいのだ。それをよってたかって冷やかすとは何事だ。お前たちの根性は曲がるとる。並べ、歯を食いしばれ」ほっぺたを強烈なゲンコツで殴られました。皆一発ずつですが、よろよろとしました。私も並んでいましたが、私への一撃も友達と全く同じで、私はその場に打ち倒れました。私は倒れながらも「これでよかった」と思いました。もし先生が、私を叩くのを控えたり、そっと叩かれたりすると、私は友達の仲間としては、付き合ってもらえません。私は 3 歳の時、小児麻痺にかかり、その後遺症で、足を引きずって歩いていました。そんな私を友達は特別扱いせず遊んでくれました。つまり、差別のない世界でした。それを先生が手加減されると、かえって差別になります。同じように叩かれたので私は何事もなく生活できました。私は先生から叩かれたことを今でも感謝しています。差別は怖いです。差別のない世界。それこそが、社会生活の平穩を保ちます。

谷口先生の授業では、最初に必ず諺を一つずつ毎時間教えていただきました。ある日の授業のこと、4 人の生徒が「教科書忘れました」と先生の前に行きました。いつもは、あまり叱らない先生もこの日だけは腹に据えかねたのか、ゲンコツを一発ずつ見舞いざま、その日の諺を急遽変更して「仏の顔も三度まで」と書かれました。ゲンコツを見舞われた生徒たち、「今日ほど、諺の意味がわかった日はありません」・・・と。先生は左手と右足が不自由でしたが、その分右手でのビンタは、痛かったのを今でも覚えています。最後に先生の言葉より・・・『私は障害教師。体の不自由な分、生徒たちに助けられました。階段を降りるとき、「先生、肩」と言って前に立ってくれます。肩に手を置いて降りるととても楽です。「いたわりの心」を養成するのに少しは役に立ったかもしれません。』「弱さをさらけ出して生きる人は強い。」そんな強い先生でした。

